



昨年9月19日、市では「おおさき婚活支援センター」を開設し、市内の結婚をしたいと考えている皆さんを支援しています。今回は、おおさき婚活支援センターのセンター長、山内泰弘さんに、センターの運営について聞いてみました。

■現在の登録者状況は
山内 現在、大崎市内外から、多くの皆さんに登録をいただいています。今は、男性に比べ、女性の登録者が少ないので、ぜひ、女性の皆さんにも利用してほしいですね。

■利用料はどのくらいかかりますか
山内 入会費や年会費などは一切かかりません。ただし登録後、婚活イベントなどへの参加料は負担していただきます。

■どんなイベントを行っていますか
山内 開所以来、「おおさき婚活プロジェクト」として6回の婚活イベントを開催してきました。古川の古代の里でのBBQや芋煮、鳴子温泉の足湯や紅葉、クリスマスパーティー、セミナーと合わせて一対一のフリートーク、田尻でグリーンツーリズム、鳴子温泉の菜の花と、大崎市の魅力もいっぱい感じられる、明るく楽しい出会いの場の創出に努めています。

■どんなセンターにしたいですか
山内 センターの愛称は、呼びやすく、親しみやすいように、マリッジ・ハンディング・サポートを略して「マリサポ」としました。これまで同様の施設が放っていた「結婚ができなくて困っている人の



■利用者とはどんな関係性を築きたいですか
山内 勇気をもって、センターのドアを叩いてくれた人は、なんとかしてゴールへと導きたいと思いますし、戸惑っている人を絶対一人にしない、利用者に寄り添う丁寧なサポートを心掛けたいと思います。そしていつか、結婚したことや子どもが生まれたことを報告しに来てくれることが、わたしたちスタッフ一同の夢です。

大崎市の進める世方創生① あなたのおおさき婚活支援センター



▲山内センター長(右)とスタッフの岩淵(左)さん

相談所」という、ちよつと後ろ向きなイメージを払拭して、明るく一步を踏み出せるような、雰囲気づくりを心掛けています。利用者が気軽に立ち寄れるあたたかくて、アットホームな場所を提供したいと思っています。

10 year story 年物語

～おおさき人の軌跡～ 10年を振り返り 新たな10年へ歩みだす



宮城県古川農業試験場
場長 永野 邦明 さん

活動の概要

大正10年に宮城県立農事試験場分場として設置され、昭和48年に宮城県古川農業試験場に改称し、独立公所となる。昭和2年に岩沼で開始された水稻の品種開発を昭和22年から引き継ぎ、これまで、ササニシキやひとめぼれなど、46品種を育成。ほかに、水稻・麦・大豆の栽培や病害虫の防除技術の開発、東日本大震災からの農地復旧技術対策や放射能汚染対策の調査研究なども行う。

食文化の多様性のためにも重要な開発 ～宮城県古川農業試験場「ささ結」開発の10年～

今、日本で作られている米の9割以上が、「ねばり」の強い食味が特徴のコシヒカリ系です。その対極にあるササニシキは、あっさりした食味が特徴のため、コシヒカリ系の米と比べると弱い印象になってしまします。また、品質が安定しにくく、食味の評価が難しいため、リスクの高いササニシキ系の米の開発は敬遠されてきました。しかし、米自体の味が目立ち過ぎず、おかずとの相性が抜群で、食が進むササニシキ系の米の開発は、米全体の消費拡大の観点からも重要です。また、和食が世界遺産に登録され、世界から日本の食文化が注目される今、ねばりのある米もあれば、あっさりした米もあるという、食文化の多様性という意味からも重要です。古川農業試験場では、平成13年から10年以上の時間をかけて、ササニシキとひとめぼれの人工交配から、ササニシキ直系の米、

東北194号(=ささ結)を開発しました。この間、ササニシキの食味を客観的に評価する選抜指標の解析を3年かけて行い、数値データ化したことでササニシキの食味に非常に近い米が選択できました。さらには、冷害に強く、穂発芽しにくいひとめぼれの栽培特性も備えることができました。大崎市発のブランド米「ささ結」として、昨年から一般作付けや販売も始まり、とても高い評価をいただいています。農業試験場では、現在も、いもちや高温などに対して、さらに強いものになるよう、絶え間なく、研究を進めています。



ふるさとの宝を次代につないでいくために ～特定非営利活動法人シナイモツゴ郷の会の10年～

「シナイモツゴ」は大正5年に旧鹿島台町の品井沼で初めて採取・発見され、県内の地名が唯一つけられた魚です。当時は、東日本に広く生息していましたが、西日本から移入してきた「モツゴ」との生存競争に負け、鹿島台では、昭和初期以降、長い間、その姿が確認されませんでした。そのシナイモツゴが、平成5年、宮城県内水面水産試験場の調査によって、鹿島台の山間部にある「桂沢ため池」から、60年ぶりに再発見されました。

このことがきっかけとなり、わたしたちの活動が、平成14年から始まりました。シナイモツゴを増やすため、採卵方法や飼育方法を確率させ、小学校の児童たちに卵から育ててもらい、育った稚魚を放流する「里親制度」を導入し、在来種の天敵ブラックバスなどの外来種の駆除方法も確立しました。また、「シナイモツゴ郷の米」

の認証を通じた農家との連携から、田んぼやため池の環境保全を行い、大崎市内や仙台、東京でシンポジウムを開催し、広く活動をPRしてきました。これまで、活動の幅を少しずつ広げながら、継続的に取り組んできましたが、それでもシナイモツゴは、いまなお環境省のレッドデータブックで「絶滅危惧ⅠA」に指定される大変希少な魚なのです。ふるさと大崎市の大切な「宝」を次代へつないでいくために、地道に長く活動していきたいと思います。



▶里親小学校の子どもたちによるシナイモツゴの稚魚放流



特定非営利活動法人
シナイモツゴ郷の会
理事長 二宮 景喜 さん

活動の概要

平成14年、シナイモツゴが再発見された池に侵入したブラックバスの駆除を契機に、参加したボランティアが中心となって会を発足。平成16年にNPO法人化。シナイモツゴの保護活動を通じた地域に根差した活動を展開し、同分野の活動において、全国の先導的役割を果たしている。農林水産大臣賞をはじめ、各種コンクールでの受賞多数。